



# 営農情報

## 「あまおう」10月の管理

南筑後・久留米普及指導センター  
福岡大城農業協同組合

### 10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

この資料は令和元年9月20日現在の登録資料に基づいて作成しています。農薬使用の際にはラベルや袋に記載されている適用作物などの登録内容と有効年月を確認してください。

#### 花芽分化のまとめ

早期作型は、8月下旬の大雨後に入庫した苗で一部バラつきが見られましたが、順調に花芽分化が進みました。9月以降は平年より高く気温が推移したことから、普通作型の花芽分化の中心は9月25日～26日頃となりました。8月下旬以降の連続した曇雨天により定植ほ場準備が心配されましたが、9月に入り好天に恵まれたことで大きな遅れなく定植されました。

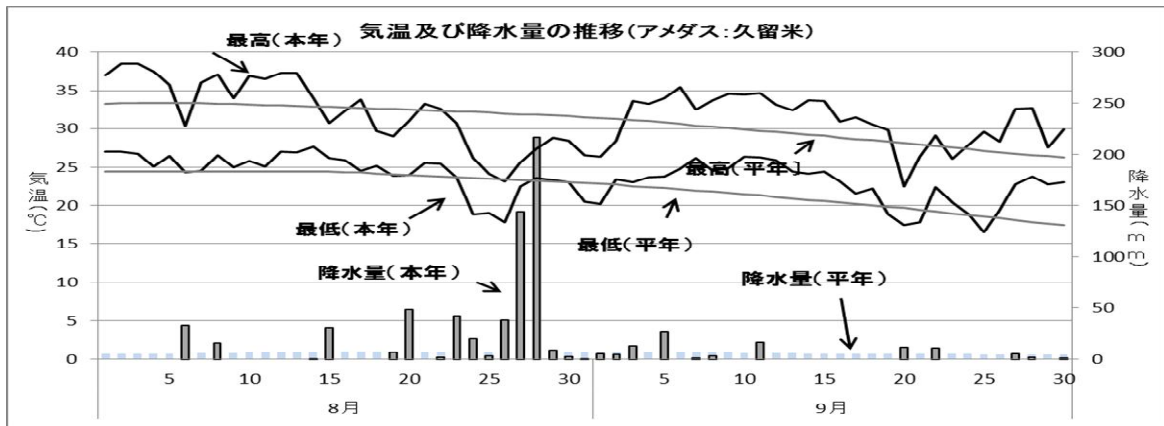


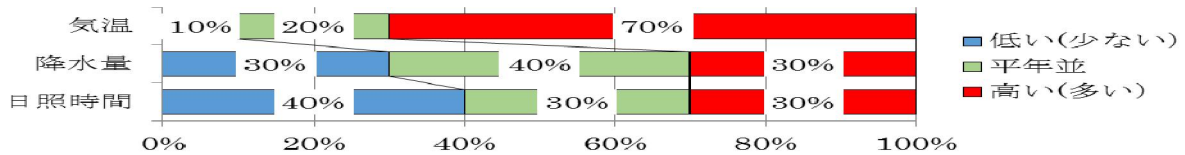
図1 気温及び降水量の推移（アメダス久留米より）

#### 気象予報と今後の見通し

##### (1) 気象予報

福岡管区気象台が発表した1か月予報は次のようになっています。

◆1か月予報（九州北部地方 予報期間：9月28日～10月27日 発表日9月26日）



##### (2) 今後の見通し

10月は平年より気温が高い予報となっています。生育が旺盛になった場合は2番花房の花芽分化の遅れが懸念されます。また、育苗期間中にハダニ類の発生が多かったことから、今後も発生の拡大に注意しましょう。

#### 今後の管理のポイント

##### [懸案事項]

- ①早期作型における2番花房の花芽分化遅延
- ②ハダニ類、ヨトウ類の発生拡大

##### [対策]

- ①寒冷紗を被覆して、花芽分化を誘導する。2番花房の花芽分化を確認して被覆を除去する。  
(被覆期間の目安：9月25日～10月20日)
- ②定期的に薬剤による防除を行う。特に、葉かぎ後の防除を重点的に行う。(葉かぎ後はハダニ類のいる葉裏に薬液がかかりやすいため。)

【表1 10月10日頃の草勢の目安】

寒冷紗被覆した場合

作型	展開した最大葉の葉幅	葉長
早期作型 (9月15日頃定植)	8.5 cm	9 cm

※寒冷紗被覆しない場合、葉幅は7.5 cm。これ以上になると1番花房と2番花房の内葉数が多くなる可能性がある。また、これより極端に劣る場合は、無理な抑えはしない。葉幅の長さにより草勢を判断し管理のしかたを変える。

### 草勢判断の目安（早期作型）

最大葉の葉幅を計測する



10月上旬の最大葉幅長（定植後出葉した中で最も大きい葉の横の長さ）を測定する。

### 1. かん水管理

#### ① 活着までの間

極端なかん水は避けて少量多回数を心がけ、順調に活着させる。

活着後はかん水を控えながら、2番花房分化後は生育に応じてかん水を調節し、根張りを良くする。10月上旬頃のかん水の目安は葉が軽く内側にまく程度とする。

#### ② マルチ後から果実肥大期

吸水量が増えるのでかん水をやや多くする。特に、マルチ後はチップバーンを予防するため十分なかん水を行う。収穫期には着色・食味を考慮して控えめのかん水とする。土壤条件が思わしくない場合などは、発根促進資材や土壤改良資材を利用して発根を促す。

### 2. 株整理(下葉除去・どろ芽除去)

- 活着した定植20日目頃から、傷んだ葉・枯葉を取り除く程度の葉かぎを実施する。
- マルチ時に葉数が4～5枚になるよう摘葉する。
- 葉かぎをしすぎると心葉の展開が急激に進み、2番花房の分化に悪影響となるので極端な葉かぎは避ける。
- 摘葉後、ハダニやうどんこ病などの病虫害防除を実施する。
- 不要な腋芽やクラウンから発生するどろ芽・ランナーは早めに除去する。

### 3. マルチ

早期作型では頂果房の出蕾が始まったら、花蕾を傷めないようにマルチ被覆を済ませる。普通作型では10月下旬が目安になる。

- マルチによって地温や水分条件が変化するため、生育が旺盛な時期には、急激な乾燥によるチップバーン等に注意する。

また、マルチ被覆が早すぎて生育旺盛となった場合には、2番花房の分化が遅れる傾向がある。

- 根張りを促すため、最初はマルチのすそを畝の肩まで上げておく。地温が13℃以下になる

10月末～11月上旬頃に全面被覆にし、地温確保とハウス内湿度の低下を図る。

- 適期から遅れて定植したほ場や、生育が悪いほ場では、生育促進のためにマルチは早く行う。

#### 4. 2番花房分化対策

##### (1) 追肥

2番花房の分化時期は、作型や気象条件によって変動するが、通常早期作型では10月中旬以降、普通作型では10月下旬以降である。この時期の生育状況によっては、2番花房の分化が遅れることがある。

- 活着不良等で生育が悪い場合は、液肥や葉面散布で生育促進を図る。
- 草勢が旺盛（10月上旬で最大葉幅8.5cm以上）で、マルチ被覆までに2番花房の分化が確認できない場合、畝の追肥を控え2番花房の分化後に溝肥を施用する。
- 普通作型の場合、追肥はマルチ張り（10月下旬頃）の3～4日前に行う。

【表2 追肥量の目安】

肥料名	成分率 (%)	投入量 (kg/10a)	窒素量 (kg/10a)
あまおう専用肥料	8-6-3	60kg	4.8kg
新生いちご配合	6-6-4	80kg	4.8kg

##### (2) 草勢管理（寒冷紗被覆とかん水制限）

早期作型は2番花房分化対策を実施し、花芽の状況を検鏡で確認する。

いつ分化するのか（したのか）、内葉数は何枚なのかで、その後の管理が変わってくる。

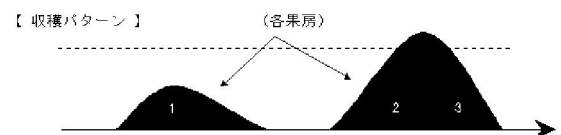
直近の1か月予報では、平年より気温が高いと予報が出ているため、早期作型は、寒冷紗被覆とかん水制限により生育が旺盛になり過ぎないように管理し、花芽分化確認後、生育促進を図る。ただし、普通作型については2番花房分化対策は必要ない。

～早期作型における「定植後の草勢」と「収穫量」の関係～

##### ① 草勢の強い生育をした場合

（葉幅が8.5cm以上、葉の展開が早い）

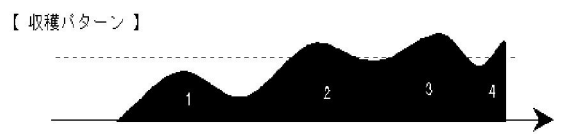
2番花房の分化時期が遅れ、内葉数も多くなり、収穫量の時期別変動が大きくなる。



##### ② 中程度の草勢で生育した場合

（葉幅が8.5cm程度、葉の展開も中程度）

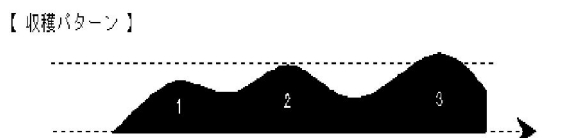
2番花房の分化時期が早めで、内葉数も多くなり（4枚～5枚程度）果房の発達に十分な草勢も厳寒期を通して確保でき、収穫量が安定する。



##### ③ 草勢の弱い生育をした場合

（葉幅が8.5cm以下、葉の展開が遅い）

株の栄養状態が低いため、2番花房の分化が早く、内葉数も少ないので、花房が連続し収穫量の変動は小さくなるが、果房の発達が弱く、株疲れしやすいので収穫量が劣る。



#### 5. ビニル被覆と寒冷紗除去

- 定植後からの寒冷紗は2番分化確認後速やかに除去する。
- ビニル被覆は平均気温が16℃程度となる頃が目安。ビニル被覆は第2花房の花芽分化後に行うのが基本だが、既に1番花房が開花している場合で雨天が予測される場合は、速やかに被覆

**する。**（花に強い雨があたると、奇形果の発生が懸念されるため）

- ビニル被覆後は、サイド・妻面を開放し、出来るだけ気温が上がらないようにする。
- サイドや妻面は、最低温度が10℃を下回るようになったら、閉め込みを行う。※ただし閉めこみ後、夜温が10℃を上回る日は換気を行い、果実の早熟や急激な株の立ち上がりを防止する。
- 草勢が弱い場合、ビニル被覆を早め、やや高めの温度管理で生育促進を図る。

【表3 果房の生育状況別温度管理の目安】

頂果の状況	昼間	夜間	備考
～ 着果期	26～28℃	10℃	新葉の生育促進
着果期 ～ 白熟期	24～26℃	7～10℃	
白熟期 ～ 収穫期	20～24℃	5～7℃	収穫中は品質向上のため低めの管理

## 6. ジベレリン処理

- 1番花房出蕾直後～開花直前に、10ppmで5cc/株の処理を行う。
- 湿度が低いと効果が低いので、かん水後に処理する。
- 開花後にジベレリン処理した果実は、奇形果になる可能性があるので開花前に処理する。

**ジベレリン使用した際には、忘れずに防除履歴に記帳してください。**

## 7. ミツバチの導入と管理

- 農薬によってはミツバチへの影響があるため、日数には余裕を持って防除する。
- 巣箱の搬入は頂果房の開花7日前までに行い、環境に適応させておく。
- 一般にミツバチは20～23℃前後で最も活発に訪花活動して、14℃以下の低温や25℃以上の高温条件下ではほとんど訪花しない。

寒冷紗被覆ハウスにミツバチを搬入する場合は、訪花を促すため巣箱をハウス内に入れておく。

- 基本的に巣箱はハウスの外に設置し、ハウスにミツバチの出入り口を設けておく。

**全国的に交配用のミツバチが不足ぎみとなっています。ハチの管理等は養蜂農家と十分に相談し、健全なミツバチで確実な交配を心がけて下さい。**

## 8. 病害虫

ハダニの発生が続いており、ヨトウムシ、スリップス類も増える時期なので、早めの防除を心がける。

- ハダニの防除について：マルチ前の葉かぎ後、発生の有無にかかわらず、**効果の高いダニ剤**を必ず散布する。また、回数制限のないフーモンなど気門封鎖剤も活用する。ただし、殺卵効果のあるダニ剤と組み合わせて散布する。
- **定植後の炭そ病の発生も懸念されるので、予防防除を行う。また、うどんこ病の予防防除は確実に行う。**

## 9. 親株の管理

- 本田の栽培面積に応じて、十分な親株本数を定植する（本田栽培面積10aあたり600～800株）。
- 炭そ病が発生していない健全な苗を使用する。
- 年内に生育を旺盛にした株が、春先のランナー発生が多くなるので、11月までに定植を終わらせておく。
- 親株の数が不足する場合や、親株用の苗に炭そ病の発生が多い場合は、ハウスビニル被覆後の本田の株から発生した秋冬ランナーを利用する。ハウスビニル被覆前に発生したランナーは降雨により炭そ病に感染している可能性が高いため、必ずハウスビニル被覆後に発生したランナーから採苗する。
- 定植前に親株を冷蔵処理（5℃以下の低温に20日間程度）を行うと春先のランナー発生が良くなる。

**農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！**